

感情と認識の相互作用 — 矛盾情報の統合による他者感情の理解過程 —

望月明恵

(お茶の水女子大学人間文化研究科)

【問題】

情動推測研究の分野では、①表情手がかり(facial cue)と②状況手がかり(situational cue)を利用した情動推測が関心の一つとなっている。

①と②が矛盾している場合、二つを合理的に考慮して他者の情動を推測すること＝「統合」について、先行研究(e.g. Lightfoot & Bullock, 1990; 笹屋, 1997)では「就学前児には不可能」と示された。

しかし Hoffner & Badzinski(1989)は「就学前児でも統合可能では」という更なる検討を示唆している。

【実験Ⅰ】

目的ならびに仮説：幼児の統合能力の検討。

デザイン：年齢(年少・年中・年長)×課題(ポジティブ(P)状況・ネガティブ(N)状況)。

被験者：都内区立幼稚園・保育園などの幼児 114名(男児 53名/女児 61名)。

材料：不一致カード→状況(P/N)と表情(P/N)が不一致の絵。

手続き：個別実験。①状況の説明提示→②情動のラベルづけ→③理由づけ回答

標準データ…大学生 39名(男性 27名/女性 12名)を対象に施行(質問紙形式)。

評定：評定者2名が回答内容を分類(評定一致率 92.4%)。状況と表情を考慮→「統合」/表情(状況)のみに注目→「表情(状況)説明」/それ以外→「説明不可」の4つに分類した。

結果：P状況-N表情課題(以下、P状況課題)とN状況課題に関して、年齢×パターンの χ^2 検定・残差分析→P状況課題では有意($\chi^2(6) = 11.6, p < .10$) (Figure.1)。N状況課題では有意な結果は得られなかった。

考察：年長群は成人と同程度に統合可能だが(P課題)、N状況課題では有意な結果が出ず、仮説が支持されたとはいえない。

→「統合」を阻むものとは？→実験Ⅱ

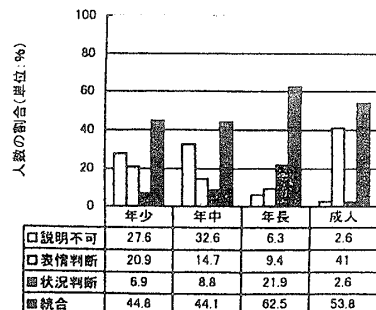


Figure 1. 年齢別回答パターン(P状況課題)

【実験Ⅱ】

目的：統合の要素として、「矛盾の認識」「説明スキル」の2点を検討する。

デザイン：年齢(年少・年中・年長)×教示群(矛盾明示・説明訓練・統制)×課題(P・N)

被験者：都内区立保育園児 80名。男 39名女 41名。

材料：(a)教示訓練用の絵…不一致カード(P/N)。

(b)実験施行用の絵…P/N状況それぞれ5種類の不一致カード。

手続き：(a)段階で教示群によって、異なる教示を行った(矛盾明示群では矛盾を、説明訓練群ではさらにその理由づけも被験者に言語化させた)。全体的な流れは実験Ⅰと同じ。

得点化：回答内容を3名で得点化。2～0(3件法)で2点が「統合」。平均を分析対象にした。

一致率は3人一致87%、3人中2人一致94%。

結果：t検定…P得点>N得点($p < .01$)→以降の分析はP/N得点を別々にした。(性差なし。)年齢×教示群の分散分析(多重比較はTukey法を使用)をそれぞれ行った。

・P得点：交互作用($p < .05$)…年少で説明訓練群>統制≒矛盾明示($p < .05$) (Figure 2.)

・N得点：教示の主効果($p < .05$)…説明訓練群>矛盾明示群≒統制群($p < .10$) (Figure 3.)。

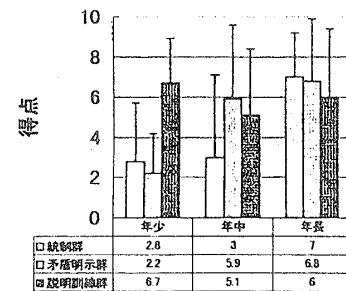


Figure 2. P得点における交互作用

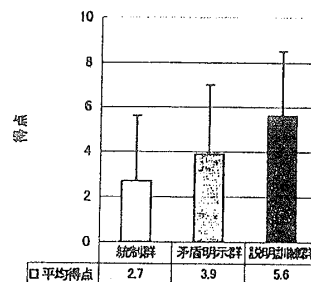


Figure 3. N得点における主効果

考察：統合には矛盾認識だけでなく、説明スキルが必要である。就学前児は矛盾に気づくことはできても説明能力の未発達さから、うまく統合できないのではないかと。また、実験Ⅰと同様にポジティブバイアスが見られた。

【総括的考察】

本研究では就学前児の統合能力を確認することはできなかった(実験Ⅰ)。そこで「統合不可」と「統合」を分ける要素について検討、その結果「矛盾の認識」+「その説明能力」が必要であることが明らかになった(実験Ⅱ)。これまでの矛盾手がかりを用いた情動推測に関する研究には見られなかった「統合に必要な要素」を実験的に検討した点で意義深いと考えられる。